



理事会だより (3・9)

一、池田会長より、定期総会が節目の70回になること、桜まつり大会の横断幕二幅が隔間みどりさんより寄贈があったこと、の報告。

二、桜まつり兼題投句は百七十名五六八句、参加見込み約七十名と報告。外部選者に芳賀陽子(横須賀)内藤ちよみ(横浜)の二氏を加える提案があり承認。

(事業部)

三、審査会運用基準につき会長より、検討の経緯と案の説明があり承認、四月桜まつりから実施。「審査会運用基準」は全会員に配布

四、桜まつり、立春青空句会の会計報告。(会計部)

五、定期総会の議案書案が配布され四月理事会にて審議することに。(総務部)

理事会日程

総会 4 / 27 5 / 11 6 / 8

(毎月第二木曜日 十五時開催)

「俳句おだわら」10句抄 (667号より)

小島ノブヨシ 抄出

溪流の水が水押し年詰まる  
う回する先は大河か色鳥来  
猫探すちらしポストに雪催  
敵しくも飲み屋の笑顔湘子の忌  
梅を見て淋しくなつたから帰る  
笹鳴や枕の下にワン・コイン  
仰向けとうつ伏せ霜降りにけり  
かいつぶり二羽いてにんげんも二羽いる  
マスクして嘘を半分隠しけり  
釣人が冬のうららを袈裟斬りす

佐宗 欣二 抄出

行く年の待ち合ひ室の木椅子かな  
並木みな切りつめられて十二月  
冬すみれ雑木林のがらんどろ  
戦火尚しづかに灯る聖樹かな  
櫓くべて火を喜ばす年男  
故里の無人の駅の松飾り  
霜柱且過の僧を見送れり  
天折の夫の書斎の淑気かな  
梅を見て淋しくなつたから帰る  
到着の寝台列車雪匂ふ

近藤 久江	宮崎 悦女	佐宗 欣二	鳥海 壮六	木村 和彦	寶子山京子	瀬戸 正洋	大石 雄介	小澤 園子	田畑ヒロ子	山崎 悦子	池田 忠山	加藤 富江	杉本 久子	尾崎 竹詩	小野 菊土	庄司 下載	杉崎 せつ	木村 和彦	島 梅乃
-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	------

## 令和四年度年間ベスト一句集鑑賞

(一句鑑賞のほか二句抄出)

百年の人生二兎を追ってみる 杉山あけみ

人生五十年と言われた時代も記憶にあるが、今はもう百年の世の中。周辺には澁刺と日々を謳歌している人を多く見受けます。この時代なれば両手を広げ二兎をしつかりと掴み、それぞれに邁進することも可能です。

一兎では得ることの出来なかつた事も、二兎の中で倍以上の発見に出会うこともあるでしょう。そんな力強い元気を沢山いただいた一句です。

「みーつけた」鬼の駆け寄る露のとう 岡田 典代  
カーテンの中の孤独や青嵐 中野 文子

(一ノ瀬茂代)

蛇口よりたましひしたり落ちてくる 小島ノブヨシ  
人は誰しもが肉体の内にもう一人自分が棲んでいて、老いてゆくたび、このしたたりのように人生の無常を愁うようになるのでしょうか。いつかは消えてしまう存在の宿命。しかし、現実にはまた今日もお腹は減るのです。

蟪蛄やガラス戸越しのバントマイム 岩楯恵津子  
口喧嘩する妻が居て冬薔薇 中津川晴江

(大佐田うづき)

戦争はよせとひまわり凜と立つ 木村予史重

口語体で直球の表現に共感です。終わりの見えないロシアのウクライナ侵略戦争の早期の終結をひまわりに託して。ひまわり畑の大地にはかつての侵略の犠牲者が眠っているそうです。平和を願うたくさんの魂がひまわりとなって叫んでいるのでしょうか。作者もそこに凜として立っています。

夜半の秋無性に文字を食べたくて 小林永以子  
百年の人生二兎を追ってみる 杉山あけみ

(岡本史郎)

百年の人生二兎を追ってみる 杉山あけみ

「二兎追うものは一兎も得ず」という諺がある。確かに同時に二つのことをしようと思っても、どっちつかずになる。だが、今の時代、みな長生きになった。若い時は仕事、それからもう一つの人生、いやもつと沢山の人生が生きられる時代なのだ。その中の一兎は俳句かも知れない。本当の自分の生きたかった人生がまだまだできる。何と生きることが楽しく、希望に満ちた句ではなからうか。

霜柱踏む泉下の吾子を愛おしむ 大佐田うづき  
山笑うその時私は鳥になる 木村 和彦

(加藤かほる)

紫蘇を揉むこの残生のおきどころ 尾崎 一夫

毎年六月になると梅を漬けることとなる。梅雨明けに三日三晩の天日干し、人生いろいろあるが、私としては年間行事の主な一つである。紫蘇を揉み、梅とともに土甕に入れるわけですが、この時の紫蘇の香り、手に着いた紫色、これこそ残り余生の仕事であり、これが家族の元気の賜物と秘かに思っている。

樟の大きな日影祭馬

鳥海 壮六

故里の余白を埋めて稲穂立つ

山口 千代

笑顔にも涙ひとすじ卒業歌

(風間秀泰)  
高井 幸子

中学の卒業式ではないかと思われる。この三年間はコロナで全ての行事が中止となり、校歌も声を出して歌う機会もなかったであろうが、しかし友達たちと楽しい三年間の思い出が沢山出来たことであろう。卒業式では笑顔で楽しかったことが走馬灯のように浮かぶ。そして最後の校歌にふっと寂しさがこみ上げ、涙が一筋頬をつたう。卒業式のどこか切なさが伝わってくる一句になっていると思われる。

梅見客おりて電車が軽くなる

池田 忠山

白梅の白さに勝る香りかな

坂入清四郎

(門松鳳文)

結果待つ窓はふるえて青嵐 峯尾ユキエ

さて結果はどうだったのでしょうか？良きにつけ悪きにつけても結果が出るまでは、ハラハラ、ドキドキ、ワクワク、不安いっぱいです。若葉青葉の明るい光の中、爽やかな香りまでも含んだ少し強めの風が窓辺をゆるする朗報だった事でしよう。共感の一句です。やさしさをときどき忘れ草の花

天高し庭師の開ける空がある

小澤 純子  
市川めぐみ

百年の人生二兎を追ってみる

杉山あけみ

その昔、人生五十年と言われ、今やその倍の百年と言われる。生活環境が整い、食生活が改善され、寿命がこれからも、ますます伸びてゆくであろう。与えられた人生、有意義に過ごす。何と幸せなことであろう。まだやり残していることに挑むことも出来るかな、と思つたら、眼の前に明るい世界が開けてきた。とりあえずは俳句！私ももう少し深い、心のある句が詠めたらうれしい！

青き踏むホップステップ水たまり

神山つとむ

化石展外はヒト科に降る落葉

佐々木重満

(近藤久江)

(8頁下段につづく)

俳句おだわら(3・19メ切り、到着順)

◆小田原鹿火屋(2・24)

久江報

杜千年どこ曲りても風光る

足立 和子

冴返る軸の達磨の睨みかな

川本 育子

鈴成りに餌を待つ雀寒夕焼

高橋 小糸

浮雲へ彩移したる紅椿

山崎 悦子

引く波の砂にははの名冴返る

近藤 久江

◆香雨・梅ごち(2・26)

忠山報

立子忌や大樹にけふも鳥のこゑ

肥後ちさこ

沈丁花子らの声なき路地となり

関戸わよこ

ゆつくりと別れ惜しげに流し雛

青山 典子

船頭の太き二の腕風光る

門松 鳳文

春一番予報どおりに通り過ぐ

吉田 百代

いつしかに主役はねむり雛祭

吉田 康雄

雛人形母と飾りし頃のこと

陌間みどり

淋しさや春日照つても翳りても

小澤 純子

残されし思ひのさぞや鳥雲に

池田 忠山

◆春野(2・19)

きよ志報

探梅行師の言の葉を探しつつ

秋山 昇

ていねいに磨く手鏡春立てり

伊藤はる子

三歩先歩む子の影寒明くる

内田知江子

切り張りの蝶がとびたつ春障子

尾崎 一夫

蚕豆の寄り目ばかりの花であり

瀬戸 悠

あたたかや膝ついてきく子の話

二見 和江

立春大吉占ひは凶なれど

長谷川きよ志

◆青梅(3・8)

幸子報

春雪を抱へて富士の凜とたつ

大塚 行人

ピンク着て花めぐりせり四季の里

湯本とし子

客寄せて春火鉢置く八丁目

加藤まり子

春光のガラスに映る背を伸ばす

久保寺トミ子

春一番明けの海原汚しけり

田渕 令子

ご機嫌に老ゆる呪まじなひ山笑ふ

田中 幸子

◆みなみ(2・18)

かほる報

茶を飲みつ会話楽しむ春炬燵

小瀬村信子

舌頭に転がす一句春炬燵

加藤 富江

まだ読める句集の文字や春炬燵

加藤れい子

ポイ捨てるの缶笑いだす春一番

加藤 健治

頬杖がぱつとはずれて春炬燵

市川めぐみ

公魚の身を反らせつつ釣られけり

豊田 幸枝

春炬燵指のさきより眠くなる

斉藤 静

ささらぎという言の葉にある明日

加藤かほる

◆沈丁(3・2)

寶子山報

春分や何をするにも梃摺りて

若村 京子

春分の日宝さがしに行くわたし

柳澤ミサ子

元気がい春分の日の立ち話し

田中 惠一

一歩づつ踏みしめながら梅の園

河本 純子

春分の日の空をパラグライダー

瀧本 敦子

春彼岸老いた姉妹はよくしゃべる

勝木 澄子

砂時計春分の日の五分間

菅野 英余

拉致被害の終わりになき声春ともし

高井 幸子

リメークの春着や無二の宝もの

片野 節子

春分の陽のほこり纏った豆発見

峯尾ユキエ

新品の靴の軽さや春の日よ

河本チヨ子

育児帳を娘につなぐ春分の日

清水美代子

チャレンジの東風先づは「宝島」

松下 俊之

春分や火花散る駒名勝負

武居裕美子

重宝なバッグにスマホ桜餅

寶子山京子

◆こよろぎ(3・9)

つとむ報

野を焼けば土に産声あがりさう

高杉掘三朗

シャボン玉両手広げて子の跳ねる

板谷 雅泉

湖にきてさざ波となる木の芽風

植松テル子

にこにここと友痴れにけり春の雲

神山つとむ

◆おほる(3・8)

秀泰報

青春は迷路の中の春の雪

小野 菊土

春雨を透けて万物円かなる

横塚 昌平

春雨や無口となりし里一日

高橋みどり

夕闇や気づかぬうちに春の雨

石井きよ子

雨垂れが春よ春よと唄いけり

香川 花子

春の雨素肌になじむ化粧水

石井千代子

暖かや人に優しくなれそうな

二上 光子

追憶にひたる静寂春の雨

廣田 悦子

路のとう地下には地下の秘密基地

中根登美子

春の陽にコックリ寝落ち舟揺れる

中津川晴江

春の午後それぞれ憩う喫茶店

加藤 春江

急く事も無き齡なり土筆摘む

中村 昌男

鶯の初鳴き壊すオスプレイ

風間 秀泰

◆山北(2・23)

由里子報

歩くのも仕事の一つ山笑う

和田恵美子

白梅や制服凛と女学生

尾崎 幸子

手をかざす春のストーブ師の忌日

中山 妙子

もう邪魔になり始めた春炬燵

尾崎 竹詩

赤ちゃんの手形足形山笑う

石田加津子

園児等の声春光をはね返す

竹下由里子

◆たけのこ(3・8)

悦女報

海静か丹沢連峰雪輝ける

三木 泰子

娘の頬を桜ふぶきよ完走す(東京マラソン)

小宮 早苗

春隣諸行無常の八十路坂

久津間百合子

ドライヤーの音軽やかに春仕度

徳田 公子

合格と病理検査や春そこに

宮崎 悦女

◆鷹(3・4)

十五報

駄菓子屋に猫の子囀む声朗ら

青木 孝子

後継ぎを伴ひ二月礼者かな

池田 令子

玲瓏と御饌の金目鯛きんめや午祭

西賀 久實

きさらぎの更湯に鏡曇りけり

佐宗 欣二

ひとり行く長き回廊牡丹の芽

須田 晴美

西陣の源氏絵巻や八重桜

中田 笑子

寝袋に語り合ふ子ら卒業す

百川 秀子

巻本に残る系図や牡丹の芽

山崎美知子

すれ違ひの香懐かしや春の月

柏木 良花

布巻いて釈迦の遷座や春日和

庄司 下載

子は鏝はたまた軛猫の恋

瀬戸 りん

楯の根の祠灯せり鳥雲に

高橋久美子

かげろふや鴉に牧の水たまり

中山智津子

教卓に生徒の置きし紙雛

齊藤 桂

甘眠の朝や薔薇の芽吹きそむ

芹澤 常子

囀やおでこのにきび二つ三つ

大木 敬子

寒明けや乳根垂らす公孫樹

大島美恵子

針箱の母の指貫かぎろへり

田下 昌人

山里の空の蒼さや初ひばり

中根 和子

言ひ淀む頼み事あり春の月

加藤 幾代

AIの間に答へる日永かな

高橋千代子

顔上げて落花の中にもたりけり

守屋 まち

菜の花や夕日のたまる海はるか

米山 翠

淀君は何故に強きや藤の花

來田 新子

潮騒の聞こゆる駅や春夕べ

大沢 年子

こちよく癖つく箒日雀鳴く

片野 秋子

うららかや何もなき日のお赤飯

小林 環

手作りの菓子の御返しヒヤシンス

下平 美子

墓仕舞せし大寺の朧かな

鳥海 壮六

白酒や相寄るさまに庭の松

古屋 徳男

目覚めよき今朝の庭前沈了花

村場 十五

◆実のり(3・16)

たか志報

あれやこれ思う道辺の嫁菜かな

岩本ひさみ

百年の屋根葺き替えし雛の家

杉本 久子

明治より菓屋守る内裏雛

木村 幸枝

白木蓮の月を覚まして蒼みけり

新井たか志

もぐり寝る癖毛に春をおそくして  
逆るコップの水や春一番

岩楯惠津子

◆零(3・16)

史郎報

目借り時以下同文の顔ならぶ  
ハモニカ吹く少年ポケットに胡桃

山本 すみ  
小澤 園子

花冷えや格式高き寺院とか

青木たけを

童らの柄杓取りっこ甘茶寺

小島ノブヨシ

花冷えの夜の金魚はわが灯り

伊藤 道郎

芹を摘む水の濁らぬ話して

木村美千代

あつ来た鳥の餌にミカン置く

川合 昌子

春の鴨水位の下がる城の濠

田畑ヒロ子

太陽の私信が届くいぬふぐり

木村 和彦

涙ぐむほどの思いよ曾我の梅

山田 照子

鈴なるやまたぎの里に辛夷咲く

佐藤 正子

彼岸寺石にも言ふひとりもの

穂坂志げる

きりり着た娘の衿元や花の冷え

中村 裕子

あいしあふがに三月の風樹たち

神野美代子

花冷えも苦にせぬ輩女子高生

野川木一路

隴夜のタクシー珈琲店に入る

杉崎 せつ

犬ふぐり芸名なれば星の花

岡本 史郎

この世にて声の若しや古雛

瀬戸 正洋

◆草むら(3・19)

重満報

白木蘭の蕊突いてきた指である

須田 聡子

妻の立つ物音遠き朝寝かな

石井 秀稀

冬晴れのパンフルトよ青い河

大石 雄介

昔はと語る昭和や翁草

井上 和子

失言のあれこれ冬のチューリップ

大石 和子

腕時計壊しにやってくる春月

佃 悦夫

春の水音読おまけの二重丸

杉山あけみ

南無阿弥陀仏地雷機雷に春の雷

佐々木重満

春風がふくたびごとのこぼれ花

岡田 典代

◆無所属

農鳥の飛びたつころや水温む

小林永以子

眼下なる湖の春光伊吹嶺

柴田 礼子

陽光を弾く靴音新教師

一ノ瀬茂代

恋の返信雪解け待てぬYES・NO

山口 千代

ふきのたう木漏日じつとしてをれず

畠 梅乃

しやほん玉大きく大きく地に果てる

大佐田うづき

寒林にまさをき空のありにけり

出澤 洋子

春荒に煽られ読めぬ世界地図

蓑宮 わか

太極拳構への決まる梅古木

北村 文江

木村予史重

## 第十二回おいゆめの里俳句大会

三月四日、於大井町そうわ会館。兼題は「野遊び」  
「春灯」（傍題可）で二二四組。当日の席題は春季雑  
詠一句、当日発表席題「雛」で、参加者四五名。

### 兼題入賞作品

大井町町長賞

春灯や声を聞きたくなる手紙

大澤 秀子

大井町議会議長賞

地図になき丸太の橋や野に遊ぶ

吉岡 孝三

大井町教育委員会教育長賞

風あれば風の符となり野に遊ぶ

中根登美子

文化団体連絡協議会長賞

分身となりたる杖と野に遊ぶ

大澤 秀子

（以下高点順）

春灯や影絵のごとく手話の指  
誕生を待つ産院の春灯

菅沼とき子

徘徊か野遊びか今その途中

川本 育子

人の世を少し離れて野に遊ぶ

諸角 和彦

野遊びの子に追ひ付かぬ保母の笛

神山つとむ

再会の握手は両手春灯

西岡 青波

能面の口元ゆるむ春灯下

豊田 幸枝

春灯地図をはみ出す旅心

奥村 忍こ  
中根登美子

（年間ベスト一句集鑑賞つづき）

海見ゆるベンチでランチ風五月

吉田 百代

掲句は平明な措辞でリズムも良い、佳句。上五、中  
七で作者は何も語ってないが色んな景が想像できる。  
海見ゆるの視線を海岸線から次第に等高線を上げてゆ  
くと、景が変化していく。中七は一人か、複数人かで  
ランチの景が全然違ってくる。これらの組み合わせの中  
で読者は自分に合った感情移入ができればよい。風五月で  
作者の心情を吐露。季語の力で句を引き締めた。平明  
な措辞で奥深い作句に感服。

百年の人生二兎を追ってみる

杉山あけみ

今日といふ日は直下型川とんぼ

寶子山京子

（佐々木重満）

托鉢の歩調乱さず花の雨

植松テル子

この句は中七の「歩調乱さず」が良いと思う。托鉢  
は執着を断つ修行といわれている。列をなしただひた  
すらに無心に歩く。修行僧らの凜としたさまが浮かぶ。  
情緒的な季語の花の雨の取合せで美しい句になってい  
る。

十五夜や古典臨書の筆をおく

尾崎 幸子

湯治場の小さき朝市寒卵

田淵 令子

（須田晴美）



野遊びやよく飛ぶ爺の竹とんぼ  
水のごゑ風のごゑ聴き野に遊ぶ  
文机あづまゑに積もる月日や春灯

席題入選作品（高点順一〇位まで）

明日流す雛に一夜の灯をともす  
和紙取れば俄かに雛の吐息かな

尻もちは地球のえくぼ山笑ふ  
母ほどの母にはなれず雛飾る

子等去りて地蔵が握るつくしんぼ  
里雛外に出たがる日和かな

氣負わずに暮らす余生や梅日和  
宙を舞ふスケボウ少女風光る

現世うつしよの埃払ひて雛納め  
一人居の雛につぶやく一人言ひとりごと

### 秋蛙ころぶ円周率は永遠

（令和五年一月号）  
杉山あけみ

鑑賞  
ら  
だわ  
お  
俳句  
理屈では理解できない難解句？であろう。秋蛙ころぶと円周率は永遠の取合せであろう。秋から冬にかけて、餌も少なく蛙も体力が落ち転ぶことも。円周率は無理数で、最終桁数は何処までも続く。これを作者の感性で永遠と感じたのであろう。冬眠から覚めた蛙は春になると数多の卵を産む。永遠に続く生々流転。秋蛙と円周率の取合せに脱帽。  
（佐々木重満）

### 初蝶や若さ引きだす畑仕事

古屋 徳男

作者は、不意に現れた蝶に春のおとずれを感じ、仕事の手を休めたのではないか。立春を過ぎた頃から本格的な畑仕事が始まる。毎日砵々畑仕事に勤しむ。掲句の「若さ引き出す」という率直な表現に、毎日変わらず畑仕事のできる暮しに、喜びと感謝の思いが伝わら共感を覚える。丹精を尽くした畑が広がっているのだらう。こちらも元気を頂けた。

花並木タクシー徐行してもらふ  
身になじむ木綿の農良着秋涼し

佐宗 欣二  
久保寺トミ子  
（山崎美知子）

### 一切を預けて冬の手術室

武居裕美子

「一切を」とは静かですが、内心は鋭く激しい。主婦が入院すれば夫や子供、老父母はどうなるのか。手術はうまくいくのか。麻酔は、ICUは、抜糸は等こもごもに悩む。それをおさえて冬という季語できっちり整理しています。そしてその中七の季語、これが状況主役として光ります。

よくぞ冷静な決断を歌にされました。大切に鑑賞したい一句です。

日脚伸ぶ丸くなりゆく風の角  
枯葎間合ひの言葉選びつつ

石井 秀稀  
宮崎 悦女  
（湯本とし子）

城苑俳句・夏の部

(合同句集第十二集14) 57頁より近藤久江抄出)

山車につく子らのうしろに月もつく

梅雨寒や肩に食ひ入る三角巾

母の日のつもる話は父のこと

孫という怪獣が来て青嵐

葉の匂ひ水の匂ひの蓮見かな

青梅や思考が空で滞る

しなやかに踊る花藻や柿田川

道一本天に向いて五月晴

この暑さ体の声をじつと聴き

抽出にハンカチを選る旅の朝

夾竹桃の繁み高々基地境

雨蛙原風景の中で聞く

葉の揺れに日向日蔭や昼寝覚

心頭滅却できぬ凡人氷菓食う

堰音のとどく人家や桐の花

暑き日や紐の緩みし荷が届く

天平の薨に首夏の風萎へて

猛暑日や遅れる思考また一つ

手の甲に歳を重ねて梅を干す

いつもの顔見えぬ不安や夏吟行

溪流の底より来たる涼気かな

池田 忠山

奥津 能亭

尾崎 一夫

尾崎 竹詩

小澤 純子

小澤 園子

小野 菊土

香川 花子

風間 秀泰

片野 秋子

片野 節子

勝木 澄子

加藤 幾代

加藤 かほる

加藤 健治

加藤 幸子

加藤 富江

加藤 春江

加藤 まり子

加藤 れい子

門松 鳳文

問診の身振り手振りや水鉄砲

天も地も轟かす滝活きている

梅雨寒のマトリョーシカの朱唇かな

夕立ちで誰も渡れぬ学び橋

玉砂利の音の涼しき数寄屋かな

自由とはこんなものかな夕端居

燕来るそこには誰も住んでません

つばくらめ地下商店街のからかさ屋

夏芝居腹式呼吸の女形

神山つとむ

川合 昌子

川本 育子

河本 純子

北崎 修

北村 文江

木村 和彦

小島ノブヨシ

瀬戸 正洋

\*

無所属会員の皆さまへ

「俳句おだわら」への一句を毎月19日必着で

お待ちしております(葉書にて)。(広報部)

宛先・250-0042 小田田原市荻窪五四九-17

村場十五

◆お詫びして訂正します◆

668号 1頁小澤純子さん抄出の一句目

(誤) 函南と丹沢つなぐ冬茜

山崎悦子

(正) 函嶺と丹沢つなぐ冬茜